

第 76 回講演会＜2025 年 11 月 27 日開催＞

太平洋戦争の記憶：東京とシアトルの視点から

David S. Goldstein (執筆＝黒崎 真)

- 講演者……David S. Goldstein
(米ワシントン大学ボセル校 教授)
- 司 会……黒崎 真
(本学外国語学部英米語学科 教授)
- 使用言語……英語

はじめに

2025 年は第二次世界大戦の終結 80 年という節目の年にあたる。これに合わせ、神田外国語大学 (KUIS) では、Goldstein 教授と一緒に来日したワシントン大学 (UW) の学生と太平洋戦争と記憶をテーマに合同授業を実施した。この国際交流の一環として、Goldstein 教授に、太平洋戦争の記憶のあり方について、東京とシアトルを事例にご講演いただいた。講演の主眼は、両都市が太平洋戦争を異なる仕方で記憶する理由を理解すること、そして日米の若者が互いの歴史認識について率直に語り合うことの意義に置かれた。



Goldstein 氏

トラウマ：二都市の比較

まず、なぜ東京とシアトルなのか。それは、両都市が移民を通じた歴史的なつながりを持ち、それぞれの国における「戦時下のトラウマ」を代表しているからである。東京にとってそれは、1945 年 3 月の「東京大空襲」である。一晩で 10 万人もの命が失われ、100 万人以上が被災したこの惨劇は、都市の記憶に深く刻まれている。一方、シアトルのそれは「日系アメリカ人の強制収容」である。大統領令に基づき、12 万人もの人々が「敵」とみなされ内陸の収容所へと送られ、財産や生活を奪われた。これにより、かつてシアトルで栄えた「ニホンマチ」も壊滅的な影響を受けた。

戦争の記憶：四つの形態

次に、記憶の保存・継承についてである。特に「遺物」「記念碑」「コミュニティのイニシアティブ」「物語」が取り上げられた。例えば「遺物」では、東京の「東京大空襲・戦災資料センター」が市民の苦難を伝え、シアトルの「パナマホテル／シアトル日系米国人博物館」には収容時の所持品が今も地下に残されている。「記念碑」としては、日本の「昭和館」や「靖国神社」が、それぞれ中立的な視点と保守的・国家主義的な視点から戦時下の記録や戦没者を留める一方、米国側では「ベインブリッジ島日系アメリカ人排除記念碑」や「ミニドカ国定史跡」が、負の歴史と市民的自由の重要性を現代に繋いでいる。

戦争の記憶：日米の差異

さらに、戦争の記憶を通じて得ようとする教訓について、日米の差異に言及された。日本では、「加害者と被害者」という両側面にどう向き合い、平和の尊さをいかに次世代へ繋ぐかが中心的な問いとなる。一方、米国では、「民主主義の理想と現実」との乖離に焦点が当てられ、強制収容という負の歴史を、現代における市民的自由や社会正義の教訓としていかに活かすかが中心的な問いとなる。

国際交流の意義

最後は、未来への展望で締めくくられた。歴史とは単なる過去の事実そのものではなく、現在の価値観を反映した「過去の解釈」である。したがって、異なる背景を持つ若者同士が対話することは、単なる知識の習得以上の価値を持つ。多様な視点に触れることで誤解が解

け、共感が生まれ、それがひいては平和を促進する力となる。過去を記憶することの真の意義は、単に過去を振り返ることではなく、そこから未来へ向けてどのような教訓を持ち運ぶかにかかっているのである。



司会の黒崎先生